

今回の目録をご覧くださいと、ひつじ書房を前からご存じの方も、はじめて目録を手にした方も、ひつじ書房は何をしようとしているか、わからないという印象をお持ちになるのではないのでしょうか。

言語学の出版社であるはずなのに、起業家教育の本もあり、図書館の本もある。メディア論の雑誌も創刊するという。どうなってるのと思われるのも当然だと思います。

もともと、ひつじ書房は、日本語の文法の研究書を刊行する出版社として出発し、そのジャンルを中心に12年にわたって活動を続けてきましたが、このところ、思うように単行本を出せていません。原稿の催促が上手でないということもありますが、日本語の文法の研究の世界が、一段落したころから、大学の組織改革の時期とも重なって、書き手の方が忙しくなりすぎて、単行本自体をだせない状態になっています。出版社なのですから、このままでは、干上がってしまいます。道を見いだすしかないと判断しました。

日本語の文法だけに固執せず、ことばの研究をもう少し広く考え、コミュニケーションという範囲まで広げることにしました。シンタクスの研究にとどまらず、社会的なインターアクションの中の言語行動・言語活動・言語研究に関わることにしました。

スタートした地点のフィールドで本を出せなくなったということだけではなく、学術出版の問題点を過去数年間考えてきたことから、できた知識を啓蒙するだけの内容では、本を買ってくれなくなっていることを考え、知識を作る過程から参加するようなジャンルを見つけたい、関わりたいという気持ちが大きくなりました。

参加して本を作ると言うことは、大学の中での新しい挑戦的なまだ、評価が決まっていない萌芽的な研究から、社会で起きている新しいコミュニケーションのスタイルを生み出している人々と研究者とつないだり、その人々の考えや活動をテキスト化し、共有化することにコミットしたり、従来の枠組みでは出会わないようなネットワークを作り、新しい研究ジャンルを作ることまでを含んでいます。

具体的に言うならば、『講座社会言語科学』を出すと同時に『市民の日本語』を出すことは、ひつじ書房にとって、意味があります。言語研究を中心として、社会的なインターアクションを含んだ研究をも本としてネットワーク化する一方

で、市民の新しいコミュニケーションやマネジメントを実践の中で生み出しつつあるNPOの活動家である加藤哲夫さんの提案をも連携させようということです。「市民の活動のコミュニケーションをサポートする」ことを、ひつじ書房の新しいミッションにしようと思っています。これまでの言語研究を、市民の社会的な活動をサポートするものとして、組み替えていこうということです。談話を分析した結果を、談話者にフィードバックするとか。市民の合意形成を支援できるような言語研究。社内の意志決定やスキルアップを支えられる研究。サポートすることによって、知的な営みが、社会的に必要な公共財であるということを説明できます。研究は、それ自体、尊重すべきですが、学問を支えるのが市民であるとすれば、市民に還元できるかたちに学問を作りかえる必要もあるのです。知識は、市民自らが作っていく時代になります。知の生産は横断的、協同的、相互的になるでしょう。研究者と実践者はその中で共同作業をすることになるでしょう。編集・出版という営みは、上位下達型の啓蒙から、これからは、市民の知的活動へのサポートとなります。異なった文化的背景を持った市民同士による衝突と生産と共有と参加に基づいて、知的活動が行われるようになるでしょう。その時、たぶん、知的コミュニティをどう運営していくか、ということが切実な問題になると思われます。すべてのコミュニティは知的な資源を持っています。その資源を受け継ぎ、作りかえ、育てていくということはとても大切でたいへんなことです。多くの人には意外なことでしょうが、知のマネジメントということは大きな課題です。このながれで、起業家教育や女性起業家の支援、ビジネス支援図書館の発想が生まれました。

作り手を支えようと言う気持ちは自分自身がマネッジしようという意志を持たなければ、生まれてこないものです。本の読者は、サポーターでもあったはずが、消費者になってしまった。そこに知の生産の空洞化があるということなのですから。この点で『だれが「本」を殺すのか』と認識は同じです。私の発言が一番最後にでできますので、よろしければお読みください。

ここにひつじ書房自身のもう一つのテーマがあります。「知の生産と運営を市民レベルでなりたたせる」ということです。そのような市民は、主体的な市民であるといえますが、そんな市民同士はどのようにコミュニケーションすればよいのでしょうか。論理的に話し合えば解決するのでしょうか？

ここでもコミュニケーションが課題の中心になるでしょう。どうどうめぐりをしているようですが、われわれとしては、今に誠実に取り組んでいる結果至った問題意識です。われわれの問題意識を多くの人々に共感されますように！